



存在動詞の第二中止形「いて」の意味・機能

森田, 耕平

(Citation)

神戸大学留学生教育研究, 4:1-32

(Issue Date)

2020-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012161>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012161>



存在動詞の第二中止形「いて」の意味・機能

森田 耕平

キーワード：動詞、中止形、存在動詞、アスペクト

1. 研究の目的

本稿では、(1) の二重下線部のような、存在動詞「いる」の第二中止形¹⁾「いて」の基本的な意味・機能を記述する。

- (1) 横川は、NHKのテレビカメラと一緒に警官の群れの外にいて、何枚かストロボなしで写真を撮った。
(半島を出よ)²⁾

本稿の記述の対象となる存在動詞の性質について、運動動詞とともに確認しておく。工藤(2014)によれば、動詞らしい動詞の大部分が所属する運動動詞は、一時的で動的展開のある動作や変化といった「運動」を表し、完成相対継続相のアスペクト対立によって、「運動」の内的時間展開を文法的に表し分ける。存在動詞は、文の対象的内容として「存在」すなわち「広義の「もの」の空間的存在」を表す。「存在」には、動的展開がないため、存在動詞にはアスペクト対立がない。また、「太郎は部屋にいる」のような一時的存在(滞在)を表す場合と、「鎌倉には蝮がいる」のような恒常的存在を表す場合がある。

有生物の存在を表す存在動詞には「いる、ある、おる、存在する」などがあるが、本稿では、「いる」を使用頻度が高く、用法の幅も広い基本的なものとして、その第二中止形「いて」を記述の対象とする。

本稿の背景には、森田(2017)の記述がある。本稿と森田(2017)は、動詞の中止形と、文末に位置し文を言いきる定形動詞とが表す二つの出来事の意味関係の中で、中止形の副次的な意味・機能を体系的に記述するという目的において共通している。森田(2017)は運動動詞を対象として、動詞の下位タイプやアスペクトの観点から、中止形の意味・機能のバリエーションを記述している。

本稿はその記述を踏まえて、存在動詞の中止形「いて」が表す「存在」が、定形動詞が表す主要な出来事に対してどのような副次的な意味を示し、「いて」が中止的な述語としてどのような機能を持つのかを明らかにすることを目的とする。具体

的には、運動動詞の中止形において確認された時間的關係や意味のあり方から出発して、存在文の述語としての特徴、さらには、「いて」によってその存在が表現される主体の、文中あるいは文脈における働きといった点に注目し、文法的特徴を明示しながら記述を行なう。

運動動詞とは異なる性質を持つ存在動詞に注目し、その中止形の意味・機能の分析に必要な観点を検討することで、運動動詞やその他の存在動詞も含めた、動詞の中止形一般の意味・機能のより正確な記述を目指す。

2. 先行研究

存在動詞という動詞のタイプに注目して中止形の意味・機能を記述している研究は見当たらない。本節ではまず、動詞の中止形の体系的な記述のなかで、存在動詞の性質に関わる観点を提示しているものとして、奥田（1989）、森田（2017）、大鹿（1986）を取り上げる（2.1節）。奥田（1989）は森田（2017）の直接の参照先である。大鹿（1986）はこれらと異なる観点の記述を行なっているため、後に紹介する。述語の意味的なタイプとしての「存在」および動詞のタイプの一つとしての「存在動詞」の基本的な特性については、冒頭で工藤（2014）によって確認した。ここでは、西山（1994）、金水（2006）を取り上げ、存在文の意味と文法に関する基本的な分析枠組みを提示する（2.2節）。

2.1. 中止形の意味記述に関するもの

奥田（1989）は、主語一つで述語が二つある文において、「第二なかどめ（第二中止形）」が定形動詞とともに「複合的な動作」を表す場合を中心に意味記述を行なう。そのうち、「第二なかどめ」が「主要な動作が実現する空間」を表す場合として、「洗面所にたどりついて、水道栓をひねってみた」のように移動動作を表す動詞の場合、「稜線の頂にたつて、後方を展望すると」のように「たつ」「すわる」のような動詞の場合とともに、「二階にいて、きくと」のように存在動詞「いる」の例を挙げている（同：21-22）。

奥田（1989）は「第二なかどめ」が「たつ」「すわる」のような動詞である場合については「結果的な状態としての、ある場所での滞在を表現している」としたうえで、存在動詞を含む数例について「第二なかどめは先行する動作をきりすていて、ただたんに主要な動作が進行する場所だけをさしだしているだろう」と述べる。この記述は、存在動詞の中止形が副次的な意味として「主要な出来事が実現する場

所」という意味を表しうること、さらに他のタイプの中止形の場合と連続することを指摘している点で重要である（森田2017はこの指摘に基づき、運動動詞が「場所」の意味を表す場合を記述している）。なお、奥田（1989:42-46）は「第二なかどめ」と定形動詞が表す出来事の主体が異なる場合についても記述しているが、これに関しては分析の箇所では言及する。

森田（2017）は、運動動詞の第二中止形の用例を分析し、定形動詞のアスペクトによって第二中止形が表す動作の先行性の有無が表し分けられる場合があることを指摘している。例えば、運動動詞の中止形「出て」が用いられる（2）では、定形動詞のアスペクトが完成相であるか継続相であるかによって、「出る」という動作の先行性の有無、さらには二つの出来事が継起的か否かという時間的關係が異なる。しかし「いて」が用いられる（3）では、定形動詞のアスペクトに関わらず、中止形が表す出来事には先行性がない。

(2) 彼は警官の群れの外に出て、写真を撮った。[定形動詞が完成相、先行性有]
彼は警官の群れの外に出て、写真を撮っていた。

[定形動詞が継続相、先行性無]

(3) 彼は警官の群れの外にいて、写真を撮った。[定形動詞が完成相、先行性無]
彼は警官の群れの外にいて、写真を撮っていた。

[定形動詞が継続相、先行性無]

(2) (3) のような違いは、運動動詞は動的展開のある「運動」を表し、存在動詞は動的展開のない「存在」を表すという、述語としての意味的特性と連動している。そこで本稿の分析ではまず、「いて」と定形動詞が表す二つの出来事の時間的關係を確認する。

一方で、奥田（1989）や森田（2017）の分析では、以下のような例をどうとらえるかが明らかではない。(4) では「主要な動作が実現する場所」という意味も表現されているように思われるが、文の文法的特徴や文脈上の機能からすれば、「いて」が異なった用いられ方をしているとも考えられる。例えば (4) ではその場面で初めて登場する人物の存在を表現している点で、(2) (3) とは異なる。また (5) は、(3) (4) のように具体的な時間・空間（場面）において把握された出来事について述べているのではない。そのため、例えば「同時」のような時間的關係や、「場所」といった観点からは分析しがたい。

- (4) 俺は次第次第に反対側の扉の方に押されていた。ところがふと見るとその扉口には扉がないのだ。あけっぱなしなんだ。そこにやはり闇屋らしい若い女がいて、ついにたまりかねたか、そんなに押しちゃ落ちるわ、と悲鳴をあげた。
(蜷)
- (5) 「戦死した人の子がいっぱいいて、母親を苦しめていますわ。(後略)」
(山の音)

このような例については、大鹿(1986)が示唆を与える。大鹿(1986)は、「一体的な事態の分節」という観点で「て」による接続のあり方を分析するなかで、「遊び場のすみには大きな合歓の木があって、うす紅いほうほうした花がさいたが」のような例を挙げながら、「存在詞句」による事態の分節を以下のように論じている。

これらの文では、前句は後句に本来あるはずの部分を取り出して、今仮に名付けるならば存在詞句とでも言える句に仕立てている。「遊び場のすみの大きな合歓の木にうす紅いほうほうした花がさいたが」というような本来単文であるはずの文の一部が句仕立てになっているということである。一般に文の中で有機的に結びつけられているモノとしての対象は、その存在というコトを当然に前提しながら、けれども存在するというコトを、対象としてのモノの背後に隠して顕在化させない。ところが、これらの文にあっては、それをわざわざ顕在化させて前句に実現する。したがって前句は後句の部分の抽出とってよいのだが、前提にしかすぎなかった存在そのコトが明らかにされることによって文全体としては前句で明らかになった存在そのコトについて、後句が述語するという体になっている。
(大鹿1986: 223)

本来単文によっても表し得るような一つの現実について、前句(中止形)によって「存在」を顕在化したうえで後句(定形動詞)において詳しく述べる、という大鹿(1986)の把握は、(4)(5)のような例を分析するうえでも有効であろう。また、実際の文においては、出来事の一体性を示すような種々の意味的つながりや文法的特徴も存在すると考えられる。例えば、大鹿(1986)の例では複文の(6)の「あって」の主語(「大きな合歓の木」)は、単文の(6')では対象語相当の二格名詞と対応していることがわかる。分析では、このような観点も取り入れ、二つの出来事の関係进行分析する。

- (6) 遊び場のすみには大きな合歡の木があって、うす紅いぼうぼうした花がさい
たが
- (6') 遊び場のすみの大きな合歡の木にうす紅いぼうぼうした花がさいたが

2.2. 存在文の特性に関するもの

西山（1994）は、多様な「存在文」を「場所表現を伴うタイプ」と「場所表現を伴わないタイプ」に二分し、「場所表現を伴うタイプ」の下位類を整理したうえで、「場所表現を伴わないタイプ」に焦点をあて、主語名詞句の意味特性から「実在文」「絶対存在文」といった下位類を特徴づけている。

金水（2006）は、西山（1994）を踏まえたうえで、存在文を場所名詞句や動詞の分類によって「空間的存在文」と「限量的存在文」に二分し、主語の有生・無生、「いる」「ある」の使い分けを関連づけながら、それぞれの下位類について論じている。空間的存在文は、「物理的な空間と存在対象（主語の指示対象）との結びつき」または「物理的な時間、空間を対象が占有することを表す出来事」の表現であり、場所名詞句を必須とする二項存在動詞が述語として用いられる。空間的存在文の典型は「田中さんは研究室にいる」のような「所在文」である。限量的存在文は、「特定の集合における要素の有無」または「話し手の立場から下す、世界についての判断」の表現である。典型的には一項存在動詞が述語として用いられ、場所名詞句ではなく、対象の有無を判断する際の領域を表す任意の修飾語句（「世界設定語」）を持ちうる。限量的存在文の典型は「病気をしても絶対病院に行かない人もいる」のような「部分集合文」である。

西山（1994）と金水（2006）が本稿の記述において重要であるのは、存在文の分類において、第一に、存在文と具体的な場所の表現とのむすびつきを重視している点である。この点は、動詞の中止形が表す副次的な意味としての「場所」を取り出している奥田（1989）、森田（2017）と連続する本稿においても、分類の出発点となる。第二に、存在文の意味を明らかにするうえで、存在主体（主語の指示対象）と存在文の、文脈における特性が考慮されている点である。例えば西山（1994）は「机の上に洋子のバイオリンがあった」のような「場所・存在文」について、コンテキストにおいて指示対象が話題にのぼっていないことを主語名詞句の条件としている。また、金水（2006）も、空間的存在文の一種である「眼前描写文」や限量的存在文の一種である「初導入文」の特徴づけにおいて、その文脈の中での機能に注目している。

分析では、基本的に金水（2006）の空間的存在文と限量的存在文の区別に従いながら、中止形によって提示される副次的な意味としての「存在」が、主要な出来事とどう関係するかを、文脈や物語の流れを考慮しながら明らかにすることとする。

3. データと分析の範囲

本稿は「いて」が中止的な述語として用いられる文³⁾の実例に基づいた帰納的分析を行なう。実例は以下の二つの方法によって収集したものである。

- ①戦後に発表された小説作品（文庫本50冊分）からの手作業による収集：216例
- ②現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）による収集：2319例

①ではテキストの冒頭から文脈を確認しながら、「いて」と関連する形式（その他の存在動詞「おり」「あって」「あり」等）を収集した。森田（2017）も小説の例に基づいており、本稿も基本的には小説における例を中心に分析を行なう。しかし手作業では大量の用例を収集することが難しく、テキストの量的な均衡性もないため、量的な比較はしづらい。そこでより多くの、多様なテキストタイプの例⁴⁾を収集するため②を利用した。

②の検索の方法は以下の通りである。BCCWJ (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>、中納言2.4 データバージョン1.1)により、非コアデータのうち「特定目的」の「知恵袋」「ブログ」「韻文」を除くレジスターを範囲として、短単位検索により、キーを語彙素「居る」の「連用形」、後方共起条件をキーから一語の語彙素「て」という条件で検索した。そこで得られた結果から、翻訳作品や戦前の出版物、文語や古典語の文章など、現代標準日本語の用例としては扱わない例を除いたものが上記の2319例である。

本稿では、森田（2017）と同様に、中止形が動詞述語の肯定形式にかかる場合を対象とする。「君がいて幸せだ」「林という男がいて、彼が当時の部長だった」のように「いて」が形容詞述語や名詞述語にかかる場合や、「私はその日家において大学には行かなかった」のように動詞述語の否定形式にかかる場合⁵⁾は分析の対象としない。また「彼には姉がいる」のような所有文、「彼は元気である」のような状態の表現も考察の対象外とする。

分析では、「いて」と定形動詞が表す出来事の主体が同一であるか否か（主体の同一性）を基本的な構文的特徴として重視する。これは、以下の理由による。まず、

これまでの運動動詞の中止形の分析においては、主体が同一である場合を中心に、主要な述語（定形動詞）に対する中止形の副次的な意味・機能が確認されてきたことから、「いて」の場合にも存在動詞としての特性に留意しつつ同様のアプローチを取るためである。また、以下に見るように、「いて」の場合には、主体が異なる文の出現頻度も高いため、その特徴をも明らかにする必要があるためである⁶⁾。

ここで、①②で収集した小説の例（地の文、会話文）と、②で収集した論述文⁷⁾の例の、主体の同一性による量的分布を示したものが【表1】である⁸⁾。

【表1】小説文と論述文における主体の異同別の用例数（（ ）内は%）

		同一主体	異主体	判断保留	計
① 文庫50冊	小説：地の文	88 (62.9)	52 (37.1)	0	140
	小説：会話文	27 (73.0)	10 (27.0)	0	37
② BCCWJ	小説：地の文	261 (68.9)	115 (30.3)	3 (0.8)	379
	小説：会話文	143 (76.1)	42 (22.3)	3 (1.6)	188
	論述文	551 (57.9)	388 (40.8)	12 (1.3)	951
	計	1070 (63.1)	607 (35.8)	18 (1.1)	1695

どのテキストタイプでも「同一主体」の場合が「異主体」の場合を上回っている。②BCCWJでは、「同一主体」と「異主体」の例が全体に占める割合が、小説の地の文では68.9%対30.3%、論述文では57.9%対40.8%となっている。

森田（2017）は、小説の地の文における運動動詞の中止形を対象に用例収集を行ない、主体の同一性についても分布を示している（同：27の表3）。運動動詞の第二中止形（シテ）では、同一主体が1713例、異主体が87例と圧倒的に同一主体の場合が多い。なお運動動詞の継続相当形式（シテイテ）については、同一主体が471例、異主体が331例というデータも示している（同：122の表4）。

森田（2017）と本稿のデータは母集団が異なるため、厳密な比較にはならないが、運動動詞の第二中止形（シテ）に比して、「いて」の用いられる文では相対的に異主体の場合が多く見られる。少なくとも「いて」の場合には、奥田（1989：42）の言うように「ふたつの動作のし手は、同一であることが圧倒的に多い」とは言えない。動詞のタイプと関わって、運動動詞と存在動詞では構文的特徴が異なる可能性もあることを指摘しておく。

4. 分析

本章では、まず、「いて」と定形動詞が表す二つの出来事の時間的関係を整理する(4.1節)。そののちに、「いて」の副次的な意味・機能を記述する(4.2節)。

4.1. 時間的関係について

本節では、「いて」と定形動詞が表す二つの出来事の時間的関係の側面について記述する。具体的な時間における出来事の関係について確認するため、例はすべて「いて」が個別主体による一時的現象としての存在(工藤2014の「滞在」)を表す場合である。

まず、「いて」が表す「存在」という出来事は主要な出来事との同時的関係を形成することができる。運動のように成立・消滅といった動的展開性はないが、時間の流れの中に一時的に成立する出来事でもあるからである。このことは、(7)(8)のように別々の主体が一つの場面に存在している場合には明らかである。

- (7) 山際は怒りで顔が熱くなり、心臓が口から飛び出すかと思うほど動悸が激しくなった。そのとき危機管理センターには三十人ちかいスタッフがいて、その前で**罷免**されたのだ。(半島を出よ)
- (8) 首だけ入れ、診察室の中をうかがう。伊良部は椅子にいて、看護婦はベンチで**寝転**がっていた。(ハリネズミ)

森田(2017:116)は、動作継続や結果継続を表すシテイテが、主要な出来事との同時的関係を表すことを指摘している。また、定形動詞のアスペクトの異なりによって、(7')のように定形動詞が完成相の場合には二つの出来事は「部分的同時」関係に、(8')のように継続相の場合には「全面的同時」関係にあるとする。「いて」の場合もこれと同様に考えれば、(7)は「いて」が表すある主体の「存在」と別の主体による主要な出来事は「部分的同時」、(8)は「全面的同時」関係にあるといえる。

- (7') そのとき危機管理センターには三十人ちかいスタッフが集まっています、その前で**罷免**されたのだ。
- (8') 伊良部は椅子に座っています、看護婦はベンチで**寝転**がっていた。

しかし、「いて」と定形動詞が表す出来事の主体が同一である場合には、ある主体の存在と、同じ主体による出来事が、単なる「同時」的關係にあるとはいえない。大鹿(1986)が述べるように、そもそも一つの出来事(現実)から、「ある主体のある場所における存在」という側面を、「いて」によって抽出しているとも捉えられるからである。(9)(10)は、(9')(10')のように「いて」を用いず単文にしても、表現される現実とは同じである。対して、運動動詞の中止形による(9'')(10'')は、主体が同じであっても二つの異なる動作を複合的に表現していることから、単文にすると意味が落ちてしまう。

(9) 返事をして、啓順は土産物が並んでいる土間におりた。三十代後半の恰幅のいい男がいて、にこやかに微笑みかける。(啓順地獄旅)

(9') 三十代後半の恰幅のいい男が、にこやかに微笑みかける。

(9'') 三十代後半の恰幅のいい男が {出てきて/φ}、にこやかに微笑みかける。

(10) 部屋の片附がすんで、給仕部屋へゆくべきなのが、僕は又何となく気になってフロントへ行った。こんなことはついでないことである。/もう食事はすんでいる。二人はラウンジにいて、マネージャアと話している。

(クロスワード・パズル)

(10') 二人はラウンジで、マネージャアと話している。

(10'') 二人は {ラウンジに/ラウンジで}、マネージャアと話している。

単文でも表せる一つの出来事の分析的な表現において、「いて」が一つの述語として出来事間の時間的關係の表現のために果たす機能としては、(11)のように修飾語を従えることで、一時的な存在のあり方を詳しく述べることや、(12)のように先行する述語が表す出来事との同時的關係において「ある存在との出会い」や「ある主体の発見」といった表現が可能にすることが挙げられる。

(11) るいは、長いことそのまま炉端にいて、隣の屋敷から板塀越しにきこえてくる庭師の鉄の音に、ほんやり耳を傾けていた。(白夜を旅する人々)

(12) 「やい、帰って来い」と声がした。振り返ると、林の縁に永松がいて、銃で覗っていた。(野火)

以上のように、同一主体の場合には、別々の出来事の客観的描写というより、一

つの出来事の分析的把握の表現に「いて」が用いられていることに留意しつつも、「いて」は基本的には主要な出来事と同時的關係にある出来事としての「存在」を表している。

一方で、「いて」と定形動詞が表す出来事の間には、運動動詞のように、「動作や変化が主要な出来事に先行して成立する」というかたちでは継起的關係は生じない。既に述べたように、存在には出来事としての動的な時間的展開がないからである。

ただし、出来事の前後關係が読み取れる場合もある。(13)のように「いて」が「ある場所での一時的滞在」を、定形動詞が「その場所からの移動」を表す場合や、(14)のように主要な出来事に先行して成立する主体の動作が連体修飾で表現されている場合、(15)のように出来事の推移や出来が表現されている場合である。

(13) そのバーに一時間ほどいて、二人は部屋へ戻った。 (くれなゐ)

(14) ロシアの文字はどのようなものか、と質問する者もいて、光太夫は差出された紙にたずさえてきた鷺ペンで、正月、大光と書き、別の紙にそれをロシア語でしたためた。 (大黒屋光太夫)

(15) その日は、清吾の方が先に湯小屋の流し場にいて、しばらくしてから女が昨日のように老婆を背負って崖道をくだってきたのである。

(白夜を旅する人々)

ただし(15)のような例は、一時的な出来事として、ある主体が存在する状況のなかで新たな出来事が発生するという点で、「部分的同時」關係としてもとらえられるだろう。

以上、「いて」と定形動詞が表す出来事の時間的關係を確認した。しかしながら、二つの出来事の間の意味關係は、時間的關係に尽きるものではない。また、(5)のような場合は、二つの出来事間に具体的に時間的關係にあるとは言いにくい。次節では、時間的なものに留まらない、「いて」の意味を見ていく。

4.2. 「いて」の副次的な意味・機能

次に、主体の同一性の観点により、用例を「主体が同一である場合」と「主体が異なる場合」に分けて、「いて」の副次的な意味・機能を記述する。ここでは、個別主体の一時的存在に留まらず、具体的な時間・空間に縛られない、一般的主体の恒常的存在の例も取り上げる。

4.2.1. 主体が同一である場合

主体が同一の場合を取り上げるにあたって、まず、「いて」を述語とする存在文が空間的存在文なのか限量的存在文なのかを区別する。同時に、奥田（1989）が指摘する「主要な動作が実現する場所」という中止形の意味特徴に注目する。これは、西山（1994）や金水（2006）が、場所表現に注目して存在文を分類していることとも対応する。さらに、ある主体の存在が文脈の中でどのように提示されているか、また、文にどのような構文的特徴があるかにも注意して用例をタイプに分ける。

4.2.1.1. 空間的存在文による場合

空間的存在文の述語として「いて」が用いられている場合を、①「場所提示」タイプ、②「場所・存在導入」タイプの二つに分けて記述する。以下に見ていくように、二つのタイプは、主体の存在を文あるいは文脈の中でどう提示するかという点では異なるが、主体が存在し、定形動詞によって表される主要な出来事が実現する場所を提示するという意味関係において共通する。

①「場所提示」タイプ

これは、西山（1994）、金水（2006）の分類における「所在文」によるものである。主語の指示対象（主体）は存在が前提されており、「その対象が空間的にどこに存在するか」が述べられる。場所の二格名詞は主語よりも後、「いて」の直前に位置する。ここでは、主体が一つの具体的な場面において初出の存在ではなく、既知の情報としての存在（場面に既に登場しているか語り手に認識されている人物、あるいは視点人物自身）であり、その主体が存在する場所が新しい情報として提示されていることから、これを「場所提示」タイプとする。

(16) 横川は、NHKのテレビカメラと一緒に警官の群れの外にいて、何枚かストロボなしで写真を撮った。 (半島を出よ、(1) 再掲)

(17) 高城伍長は抑揚のない発声法で、花田中尉のそのような返答をはっきりと報告した。まだ若い、少年の稚なさを身体の何処かに残したような下士官である。その時宇治は偶然隊長室にいて、隊長と共にその報告を聞いた。

(日の果て)

(18) 食事はすんでいる。二人はラウンジにいて、マネージャアと話している。

(クロスワード・パズル、(10) 再掲)

(19) 私はそのまま、失神していた。気がついた時、私はまだ鷺の背にいてうつ伏せに倒れこんでいた。嵐は止み、満天に星がちりばめられていた。(釈迦)

定形動詞が表す出来事との関係において、二格名詞と「いて」の結合によって表現される「主体の存在する場所（ありか）」は「主要な出来事が実現する場所」でもある。その意味で、二格名詞と「いて」は、場所のデ格名詞またはカラ格名詞と同じく、場所の状況語的な副次的な意味・機能を持っているといえる⁹⁾。

(16') 横川は、警官の群れの {外にいて / 外で / 外から}、写真を撮った。

(17') その時宇治は偶然 {隊長室にいて / 隊長室で}、隊長と共にその報告を聞いた。

(18') 二人は {ラウンジにいて / ラウンジで}、マネージャアと話している。

(19') 私はまだ {鷺の背にいて / 鷺の背で} うつ伏せに倒れこんでいた。

次の (20) (21) では、個別主体の習慣あるいは一般的主体の特徴としての存在が表現されている。個別主体の一時的存在の場合と同様に、二格名詞と「いて」の結合を通じて、主要な出来事の実現する場所が提示されている。

(20) 修一は {信吾と同じ会社にいて / 信吾と同じ会社で}、父の記憶係りのような役もつとめていた。 (山の音)

(21) 幼虫は川にすんでいるのではなく、{落ち葉や石のしたにいて / 落ち葉や石のしたで}、カタツムリを食べて成長します。 (星をまく人)

なお、以下の (22) では、「いて」は「主要な出来事が実現する場所」も表しているが、同時に、主体がある場所に一定時間存在することが、主要な出来事が実現する際の原因としても働いている (例えば、「いまのところに {いるせいで / いたために} ノイローゼになる」のように、因果関係を表す形式で言い換えてもよい)。場所のデ格名詞に置き換えるとそうした意味はなくなることから、単純に「場所」だけを表しているわけでないことが確認できる。

(22) 「でも、引越すとなると大変だろう」「大変だけど、{いまのところにいて / いまのところで} ノイローゼになるよりいいわ」 (愛のごとく)

②「場所・存在導入」タイプ

この場合は、金水（2006）の「眼前描写文」あるいは西山（1994）の「場所・存在文」によるものであり、場所のニ格名詞は主語より前にあることが普通である。いずれも、場面における初出の存在を、それが存在する場所と共に導入するという機能を持つことから、「場所・存在導入」タイプとする。ここでは、導入される主体が語り手にとって既知か未知かという異なりによって分けて論じる。両者は「場所・存在導入」という意味・機能と構文の特徴は異ならないのではあるが、テキストにおいては異なった機能を有している。また、主体が既知か未知かの異なりは、のちに限量的存在文による場合との異同をとらえるためにも取り出しておく必要がある。

次の(23)～(25)では、文脈上、既知の主体を、場面において初出の存在としてその場所とともに導入し¹⁰⁾、そこで実現する主要な出来事を述べる場合である。

- (23) 2年前の今日、待ちに待った手術の前日、私は病院へと東京から駆けつけました。病室に入ると、ニコニコ笑っているとても御機嫌なあなたがいて、「手術の後、しばらくお風呂に入れないので、髪を洗ってもらうんだ」と、新製品のシャンプーとリンスを手に嬉しそうに言いました。 (うたかたの月)
- (24) 「やい、帰って来い」と声がした。振り返ると、林の縁に永松がいて、銃で覗っていた。 (野火、(12)再掲)
- (25) しかし、チャン・ボンスは福岡の夜景を前にして、現実感を失いそうになっていた。／「あれね」／横にキム・ヒャンモクがいて、挑むような目つきで福岡の街を見ていた。 (半島を出よ)

物語全体からすれば既知の主体の、ある場所における存在を述べている点では、①「場所提示」タイプと連続している。しかし、①ではその場面における主体の存在は前提されており、存在の場所が新情報として提示されていたのに対し、②の場合、既知の主体がその場面に存在することが、主述の結合によって、新しい情報として改めて述べられる。

次の(26)～(29)では、未知の存在（場面のみならず物語全体において初出である存在）を導入する場合である。語り手はその場面において初めてある主体を確認し、その存在を出来事として描写している。

- (26) 俺は次第次第に反対側の扉の方に押されていた。ところがふと見るとその扉口には扉がないのだ。あけっぱなしなんだ。そこにやはり闇屋らしい若い女がいて、ついにたまりかねたか、そんなに押しちゃ落ちるわ、と悲鳴をあげた。 (蜷、(4)再掲)
- (27) 返事をして、啓順は土産物が並んでいる土間におりた。三十代後半の恰幅のいい男がいて、にこやかに微笑みかける。 (啓順地獄旅、(9)再掲)
- (28) 「親父さん」／ どうやら親戚らしいその男の人が、遠くにいる誰かを呼んだ。パイプ机が並んで、マジックで「北海道南西沖地震 青苗地区災害対策本部」と殴り書きされたところに年配の男の人がいて、本部の人と話していた。 (私の男)
- (29) ひとつ深呼吸し、ドアをノックした。すると中から「いらっしやーい」という場違いに明るい声が聞こえた。軽く会釈して中に入る。そこには白衣を着た太った男がいて、一人がけのソファに胡坐をかいていた。 (空中ブランコ)

以上の例では、いずれも、出来事の描写として、場面における初出の主体の存在とそれが存在する場所が示されたうえで、主要な出来事が表現されている。「いて」によって存在を取り立てて述べることで、視点人物と新たに導入される存在との「出会い」や「発見」のニュアンスも生じている。

①「場所提示」タイプと共通して、主体の存在のありかは主要な出来事の実現する場所でもあるので、(24') (29') のように場所のデ格名詞で言い換えることもできる。その場合でも表現される現実には変わりがないが、「いて」を用いずに単文化すると、場面や物語に初めて登場する存在を主語によって導入することになるため、「いて」を用いた場合に比べると唐突な効果があるかもしれない(特に(29')のように主体が物語において全く初出の、未知の存在である場合)。

- (24') 振り返ると、林の縁で／林の縁から 永松が銃で覗っていた。
- (29') そこで白衣を着た太った男が、一人がけのソファに胡坐をかいていた。

一方、先に取り上げた①「場所提示」タイプでは、主述の結合によって主体の存在を新情報として述べるわけではない。文脈が許せば、(30) のように主語を「いて」より後に置いたり、(31) のように省略したりすることも可能である。しかし、②「場

所・存在導入」タイプでは、主述の結合により新情報を提示しているため、(25') (26') のように、主語を「いて」より後に置いたり、省略したりすることはできない。

(30) 「三年間、同じ教室にいて、あんたは俺のことをどう思ってた？」

(まほろ駅前多田便利軒)

(31) それ以外に引っ掛かることがあるとすれば、基本的にファミリー仕様のマンションだったので、ほかの部屋には子供がいることだろうか。(中略) それでしばらく部屋にいて様子を窺ってみた。(残穢)

(25') ? 横にいて、{キム・ヒャンモクが/φ} 挑むような目つきで福岡の街を見ていた。

(26') ? そこにいて、{やはり闇屋らしい若い女が/φ}、そんなに押しちゃ落ちるわ、と悲鳴をあげた。

なお、次の(32)は個別主体による習慣としての存在、(33)は一般的主体による恒常的存在について述べた例である。物語(論述)に初出の存在を場所とともに導入するという意味・機能は、これまでに見た一時的存在の場合と同様である。ただし、物語の具体的な場面で確認された主体の存在を、一時的な出来事として描写しているわけではない。語り手が記憶や知識として認識している主体を文脈に導入するという点では、次に見る限量的存在文による場合と連続している。(32)は物語を始めるために登場人物を導入する点で「初出導入文」の場合と近く、(33)は「カジカ」という類としての一般的主体について述べている点で、特定の集合に属す主体について述べる部分集合文の場合と近い。

(32) 小学生の頃、いつも通う塾の途中で踏切があった。いまではもう見られなけれど、そこには踏切番のおじさんがいて、列車が通過するたびに踏切を上げ下げしていた。それは冬の寒い日だった。おじさんがお弁当を食べているのを私は見てしまったのだ。(ルンルンを買っておうちに帰ろう)

(33) ここは山野峡といい、石灰岩地帯で、急峻な溪谷を清流がうるおしている。(中略) 流れにぬれた岩のうえにはカジカがいて、小鳥のさえずりにも似た、まろやかな鈴をふるような鳴き声をきかせてくれる。(虫屋の虫めがね)

以上のように、空間的存在文による場合では、「いて」が主体の存在と場所、定

形動詞がそこで行なわれる出来事を表すというかたちで、一つの出来事が分析的に表現されている。定形動詞が表す出来事は、(16) (23) (27) のように完成的な動作や、(18) (24) (29) のように継続的な動作や結果状態でもありうる。ただし、次の(34) (35) のような文では、「いて」によって「主体のある場所での存在」を取り立てると、不自然な文になる。

- (34) 壇上には金屏風があり、その前には外科の元主任教授で現在は学部長の 野村栄介が／? 野村栄介がいて 座っている。 (義父のゾラ)
- (35) 下関行の特急「富士」が、定刻通り、三時二十六分、横浜のフォームに着くと、展望車のデッキに、山本が／? 山本がいて 立っていた。 (山本五十六)

これは、元の文の定形動詞「座っている」「立っている」は二格名詞との結びつきによって、存在動詞と同様に「主体のある場所での存在」を表している¹¹⁾ のに対して、「いて」を用いた場合には、「座っている」か「立っている」という姿勢(様態)の側面をもっぱら表すことになるからである(この文脈では主体の姿勢を特に述べ立てる必然性はないため、不自然になる)。しかし、(34') (35') のように姿勢のあり方を詳しくすれば、「いて」を用いても自然になる。つまり、あくまで定形動詞が「主体のある場所での存在」以外の出来事を表す場合に、「いて」がそれを分担して表現することができるということである。

- (34') 壇上には金屏風があり、その前には学部長の野村栄介がいて 特別に用意された椅子に座っている。
- (35) 展望車のデッキに、山本がいて 悄然とした様子で立っていた。

4.2.1.2. 限量的存在文による場合

次に、「いて」が限量的存在文の述語である場合を見ていく。ここでは、金水(2006)の限量的存在文の下位分類のうち代表的な「部分集合文」と「初出導入文」の場合に分けて例を確認するが、両者は主体の「存在導入」という意味・機能において共通していることを先に述べておく。

以下の(36)～(38)は、限量的存在文のうち「部分集合文」を用いた主体の存在の導入である。部分集合文は「主に連体修飾節を用いて部分集合を言語的に設定

し、その集合の要素の有無多少について述べる種類のもの（金水2006:24）」である。主体が特定されない場合が典型的である。

- (36) 昨夜のことだった。祖父の市三郎が、三重団体の農家に頼まれて、卵の油をつくっていた。(中略) / こんなことぐらい、誰でもできる。が、人々の中には、/ 「石村のじっちゃまの取った油が一番効く」 / と信じこんでいる者がいて、市三郎に頼むのだ。(泥流地帯)
- (37) ロケットをした御婦人など見ると、なんとなく中味の写真が気になるものだ。(中略) 世のなかにはお節介な輩がいて、この気になる写真の主を調査したのだが、恋人なんてのは案外と少ないそうだ。(衣食遊住がらくた館)
- (38) 「子供の父親との関係がですね、子供もあなたも苦しめることになるでしょう。」「戦死した人の子がいっぱいいて、母親を苦しめていますわ。戦争で南方へいらして、混血児でも残して来たと、お思になればいいわ。(後略)」(山の音、(5) 再掲)

続けて、「昔、ある山奥の村に、太郎という男の子がいた」のような「初出導入文」による場合も確認する。初出導入文は「存在限量によって導入される対象が特定の対象であり、導入後は唯一的な個体として取り扱われる」という特徴を持つ、「物語の展開上、登場人物を導入するために特に動機づけられた、部分集合文の一特殊類型」である（金水2006:26）。次の(39)～(42)では、具体的な場面の描写を離れ、(短いものであれ)物語を展開するために、「いて」を用いて、物語の世界に登場人物が導入されている。

- (39) 岳州の停車場司令部に高原君という一等兵の詩人がいて、暇を見ては報道部に遊びに来た。一年に近い永い旅の間で、この人が私の名を先方から知っていてくれた、二人目の人であった。(リツ子・その愛)
- (40) 彼女は読書クラブに入っていて、そこで選ばれた「今月の本」が『荒涼館』だった。メンバーの中にディッケンズの熱心なファンがいて、その女性が次は『荒涼館』でいこうと提案したのだ。(偶然の旅人)
- (41) 「じゃあ話してあげる」さくらが一呼吸置く。目が真剣だった。「わたしがずっと応援して追いかけてきた若手監督がいてね、三年振りに新しい映画を撮ったんだよ。それがものすごくいい出来でね。(後略)」(女流作家)

- (42) 「れんが乗った船は津軽丸だが、その船の乗組員に風見という人がいてな、その人が船に乗ってからのれんの様子をよく知っているんだと。(後略)」
 (白夜を旅する人々)

これら限量的存在文による場合では、部分集合として限定された主体の存在を文脈に導入したうえで、その主体による出来事を述べるという関係にある。

空間的存在文による場合との異なりは、第一に、いずれも、物語の具体的な場面における一時的な出来事として主体の存在を述べているのではない点である。(36)(38)(39)のような場合では、主要な出来事も習慣的である。従って、同一の主体についての分析的な表現であることと合わせて、二つの出来事の間具体的な時間的關係としての「同時」性を認めることは難しい。

第二に、「主要な出来事が存在する場所」を提示するという意味・機能を持ちえない場合がある。(36)「人々の中には」(37)「世のなかには」(40)「メンバーの中に」(42)「その船の乗組員に」のように「対象の有無を判断する際の領域」を表す二格名詞が伴う場合には、主体が存在する具体的な場所(ありか)を示すのでも、主要な出来事が実現する場所を表しているのでもない。従って、場所のデ格名詞への言い換えはできない。「世のなかでお節介な輩が」「その船の乗組員で風見という人が」のようにデ格名詞で言い換えた場合は範囲や資格の表現になるが、主体の限定の表現としては「世の中のお節介な輩が」「船の乗組員の風見という人が」のように規定語の方が自然であろう。

第三は、導入される主体の性質である。空間的存在文による場合には、(43)のように、物語にも場面にも初出ではない既知の主体について、それが存在する場所について述べる場合があった(「場所提示」タイプ)。また、場面に初出の主体の存在を導入する場合(「場所・存在導入」タイプ)には、主体は語り手にとって(44)のように既知の場合と(45)のように未知の場合があった。

(43) 太郎は研究室にいて、分厚い本を読んでいる。[場所提示：既出・既知]

(44) 研究室に太郎がいて、分厚い本を読んでいる。

[場所・存在導入：初出・既知]

(45) 研究室に初めて見る学生がいて、分厚い本を読んでいる。

[場所・存在導入：初出・未知]

一方、限量的存在文による場合には、(46) (47) のように、主体は話題において常に初出の存在として導入される。もし、(46') (47') のように同じ主体を既出の存在として述べるとすれば、「場所提示」タイプになる（一時的な出来事としての存在とは言えないが、空間的存在文であり、存在のありかを示す二格名詞は必須である）。

(46) {文学部には／φ} 紙の本を愛する学生がいて、今も分厚い本を読んでいる。

[存在導入（部分集合文）：初出・既知]

(47) {文学部に／φ} 太郎という学生がいて、ある時、分厚い本を読んでいた。

[存在導入（初出導入文）：初出・既知]

(46') 紙の本を愛する学生は {文学部に／? φ} いて、今も分厚い本を読んでいる。

(47') 太郎という学生は {文学部に／? φ} いて、ある時、分厚い本を読んでいた。

初出の主体の導入という点では、限量的存在文による場合と、空間的存在文の「場所・存在導入」タイプは共通している。ただし、「場所・存在導入」の場合は、典型的には、具体的な場面において知覚によってとらえられた出来事の描写を通じた導入であるのに対し、限量的存在文の場合は、語り手の知識や記憶に基づく判断を通じた導入である。個別主体の習慣や一般的主体の恒常的存在について述べる「場所・存在導入」タイプの文が、限量的存在文に近いことは既に述べた（4.2.1.1節、(32) (33)）。

主体の既知・未知については、部分集合文と初出導入文で異なりがある。まず部分集合文の場合は、「場所・存在導入タイプ」と同様、(36) ~ (38) や (46) のように語り手にとって既知の主体を導入することもできるし、次の (48) のように未知の（その場ではじめてその存在を認識・判断された）主体を導入することもできる。

(48) 私はその時初めて知ったのだが、{文学部には／φ} 紙の本を愛する学生がいて、今も分厚い本を読んでいる。 [存在導入（部分集合文）：初出・未知]

一方、初出導入文による場合には、(39) ~ (42) や (47) のように、導入され

る主体はすべて語り手にとって既知であり、未知の主体を導入することはできない。次の(49)(50)のように、語り手が全く知らない(その場ではじめて認識・判断された)主体について物語をしたりすることは不自然であろう。

- (49) ? {文学部に / φ} 初めて見る学生がいて、ある時、分厚い本を読んでいた。
 (50) ? 私はその時初めて知ったのだが、{文学部に / φ} 太郎という学生がいて、ある時、分厚い本を読んでいた。

ここまで、空間的存在文と限量的存在文の区別に沿って同一主体の場合の「いて」の使用についてみてきた¹²⁾。金水(2006)の分類には他にも「生死文・実在文」「疑似限量的存在文」といった下位類があるが、ここでは触れられなかった。今後の課題としたい。

4.2.2. 主体が異なる場合

動詞の第二中止形の記述において、二つの出来事の主体が異なる場合は、同時・継起といった時間的關係、原因・理由といった因果關係、そして並列關係といった観点によって分析されてきた(たとえば仁田1995)。

「いて」の場合、基本的に二つの出来事の同時的關係を表すことは4.1節で述べた。また、二つの出来事が因果關係にある場合や、並列關係にある場合も確認できる。例えば、(51)のような典型的な因果關係の場合は「裏切る者がいたために、全員が逮捕された」のように他の複文形式で言い換えることができ、(52)のような並列關係の場合は「看護婦はベンチで寝転がっていて、伊良部は椅子にいて」のように二つの述語の順序を逆にすることもできる。

- (51) その叛乱は、軍隊を利用し、いわゆる人民軍を創設しようとする点で大きな特徴をもっていたが、叛乱会議のなかに裏切るものがいて、全員が逮捕された。
 (埴谷雄高 エッセンス)
 (52) 首だけ入れ、診察室の中をうかがう。伊良部は椅子にいて、看護婦はベンチで寝転がっていた。
 (ハリネズミ、(8)再掲)

一方で、(53)～(55)のような例では、因果關係や並列關係のような事柄と事柄の關係は見えにくく、他の複文形式での言い換えや述語の順序を逆にすることは

できない。しかし、「いて」によって存在が述べられた主体は、定形動詞が表す別の主体による出来事に、何らかの形で加わり、一つの出来事を形成している。

- (53) 階下の三等待合室の入口には、巡査がいて、住所氏名と職業と、北海道へ渡る目的を訊かれた。
(白夜を旅する人々)
- (54) クラスに広井力君という人がいて、この人の飛行機は計算もしないのにスイスイ飛ぶ。
(エコノミストの腕前)
- (55) そのとき危機管理センターには三十人ちかいスタッフがいて、その面前で罷免されたのだ。
(半島を出よ、(7) 再掲)

奥田 (1989: 43) は、「第二なかどめ」と定形動詞が表す二つの出来事の主体が異なる場合について「ふたつの動作はなんらかのし方でたがいにかたくむすびついて、よりたかいレベルでの複合性、ひとまとまり性をたもっているようである」と述べている。ここでは、主体の異なる二つの出来事の複合性、あるいは統一性という観点から、主体が同一である場合に見られた「いて」の意味・機能の特性も踏まえて、文の特徴を整理する¹³⁾。

まず取り上げるのは、(56) ~ (59) のように、「いて」によって存在が述べられた主体が、定形動詞が表す出来事に、主体以外の別の役割で加わっている場合である。文の成分としては、「いて」の主語が、定形動詞に対して、ヲ格やニ格、カラ格、ト格名詞相当の対象語としての機能を果たしている。このことは、(56)の「これを」、(58)の「その男から」、(59)「その客と」といった定形動詞に従属する指示詞でも確認できる。先に挙げた(53)でも、「いて」の主体「巡査」は、定形動詞「訊かれた」に対して、受動文の主体(ニ格名詞相当)として主要な出来事の主体とは異なる機能を果たしている。

- (56) この境目には、蒲生範清(蒲生城主)、島津勝久の家老だった肝付兼演・兼盛父子(加治木城主)らの国人衆がいて、これを、北薩の菱刈氏(郡司系国人)や相模国の御家人の系譜を引く渋谷諸族の東郷・入来院・祁答院の諸氏、さらに日向真幸院の北原氏(肝付氏庶流)らが支援していた。(裂帛島津戦記)
- (57) それでわたしは港の近くにある地元の警察に行ったの。警官の中に流暢に英語を話せる人がいて、わたしは説明したの。連れの女性が姿を消して二晩戻ってこないんだって。
(スプートニクの恋人)

- (58) その後五六箇月経った頃私は北九州のある通信隊にいたが、そこにあの赤い崖の航空隊から近頃来たという若い兵隊が居て、私はその男から色々話を聞いた。(崖)
- (59) 「妹は、そうしてただじっと坐ってばかりいたんですか。」／「ところが、そうじゃなかったのです。妹さんの隣に子供連れの女の客がいましてね、出帆してしばらくの間はその客となにか言葉を交わしていました。(後略)」
(白夜を旅する人々)

「いて」が空間的存在文の述語として、主体の存在する具体的な場所をも提示する(53)(58)(59)のような場合には、主体が同一である場合と同じく、定形動詞が表す出来事が表す場所も表現されていると言える。

このような例と連続して、より間接的に、「いて」の主体が主要な出来事に関係している場合が二つある。一つ目は、「いて」によって存在が導入される主体が、(60)(61)のように主要な出来事の参加者(主体や対象)が属す全体、あるいは(62)(63)のようにその持ち主として提示されている場合である。文の成分の観点からすれば、定形動詞に従属する名詞を修飾する規定語相当の成分を、「いて」が導入していると言える。

- (60) 応援団長が拡声器を向ける先に一人の男がいて、カメラが切り替わり、その男の上半身がアップになった。(半島を出よ)
- (61) 馬場の中央に立派な栗毛の馬がいて、轡を綺童丸が擱んでいる。
(外法師 鶴の夜)
- (62) 「若旦那。」／と、不意に彌助の声がして、清吾は電燈の真下で我に返った。階段に近い障子を開けると、彌助は明りの届かぬ途中にいて、暗がりから声だけがきこえてきた。(白夜を旅する人々)
- (63) クラスに広井力君という人がいて、この人の飛行機は計算もしないのにスイスイ飛ぶ。(エコノミストの腕前、(54)再掲)

(64)(65)のように複数の主体を導入し、その一部を主体や対象とする出来事が述べられる、という場合もこれと近い。(66)のような場合は、まず全体となる主体(「曹洞の禅僧」を「いて」によって部分集合として導入し、それに属す人物(「黙仙という官長」)を持ち主とするもの(「書」)が主要な出来事の主体となっている

点で、複合的である。

- (64)「毎年のように、除夜の鐘を聞くまで店はやるんだらうね」先客が二人いて、その一人が訊いた。(残像)
- (65) 両親をエイズで失った孤児がたくさんいて、その子たちのまたほとんどがエイズにかかっている。(現し世の深い音)
- (66) 何代か前の悟由という管長が駿河に巡錫に見えたとき父のために書いてくれた額がいま弟のところに掛けてあるし、私の学んだ東京の中学の教師には曹洞の禅僧が数人いて、黙仙という管長の書が何点か講堂や教室に掲げられていた。(今ここ)

二つ目は、「いて」で存在が述べられる主体を基準とする「その前で」「その内側に」のような空間の限定により、主要な出来事に関する場所の表現が行われる場合である。「いて」によって提示された主体の存在する場所が、さらに定形動詞の出来事の実現に関わる場所を詳しく述べるために効いているとも言える。

- (67) 山際は怒りで顔が熱くなり、心臓が口から飛び出すかと思うほど動悸が激しくなった。そのとき危機管理センターには三十人ちかいスタッフがいて、その前で罷免されたのだ。(半島を出よ、(55) 再掲)
- (68) オラシオンから二馬身後方に、荒木の乗ったロベルトダッシュがいて、その内側にセントホウヤが並んだ。(優駿)
- (69) 橋を渡った先にもやはりたくさんの人がいて、その中に、小犬を連れた若い夫婦が座っていた。(悪の枢軸を訪ねて)

以上のような例では、大鹿(1986)に倣えば、(57') (60') (67') のように本来単文でも表せる文の一部分について、「いて」でその存在を顕在的に取り出していると言える。

- (57') 警官の中の流暢に英語を話せる人に、わたしは説明した。
- (60') 応援団長が拡声器を向ける先の一人の男の上半身がアップになった。
- (67') そのとき危機管理センターにいた三十人ちかいスタッフの面前で罷免された。

同一主体の場合に確認した「いて」の意味・機能に引きつけていえば、空間的存在文による場合であれ、限量的存在文による場合であれ、まず「いて」によって主体の存在あるいはその場所を示したうえで、改めてそれを参加者として含む、異なる主体による出来事が述べられている。主要な出来事に従属する要素を提示するという意味では、「いて」は副次的な述語であるとも言えるし、主述の組み合わせによって主体を導入しているという意味では、独立した述語としての機能を保っているとも言えるだろう。

ここでは、「いて」によって存在が述べられる主体が、主要な出来事にどう関わっていくか」という観点から二つの出来事の関係を見てきた。以上のようにして見ると、二つの出来事の間因果関係や並列関係がある場合でも、「いて」によって存在が示された主体が主要な出来事に関係している場合がある。(70)では、「黒板に素手で完璧な円を描き、見事な直線を引く先生がいること」を「感心した」という出来事を引き起こす原因的な事柄としてとらえることもできるが、「感心した」という心理的な動作の対象として「黒板に素手で完璧な円を描き、見事な直線を引く先生」の存在が提示されていると見ることもできる。また(71)では、一つの事柄(「家父長制度のピラミッド」)を構成する複数の主体の存在を並べている点では「並列」的であると言えるが、ある主体が存在する場所は、別の主体の存在とその場所が基準となっている。

(70) 小学校のとき、黒板に素手で完璧な円を描き、見事な直線を引く先生がいて、
感心した。 (理科が危ない)

(71) こうした記述をよんでいて、私たちがただちに思い浮かべることができるのは、家父長制度のピラミッドだろう。頂点のところに天皇がいて、いちばん底のところに自分がいて、中間に自分の父親、母親がいる。
(私と天皇・人びとのなかの天皇)

こうした文の特徴から、再度、動詞の中止形による因果関係や並列関係をとらえなおすことも可能ではないかと思われる。

5. まとめと今後の課題

ここまで記述したタイプを典型例と共に示せば以下のようになる。

[主体が同一の場合]

○空間的存在文による場合

- ・太郎は庭にいて、写真を撮っていた。 [場所提示]
- ・庭に {太郎が／背の高い男が} いて、写真を撮っていた。 [場所・存在導入]

○限量的存在文による場合

- ・SNSへの投稿が趣味の人がいて、いつも写真を撮っている。
[存在導入 (部分集合文)]
- ・写真部に太郎という男がいて、いつも写真を撮っていた。
[存在導入 (初出導入文)]

[主体が異なる場合]

- ・庭に太郎がいて、花子が彼を写真に撮っていた。
- ・庭に太郎がいて、花子は彼の顔を写真に撮っていた。
- ・庭に太郎がいて、花子はその横で空の写真を撮っていた。

二つの出来事の主体が同一である場合のうち、空間的存在文の述語として「いて」が用いられる場合には、主体の場所の表現を通じて、定形動詞が表す出来事が実現される場所も表現すること、また、「いて」が場面や文脈において初出の存在を導入するという機能を持つことを述べた。限量的存在文の述語として「いて」が用いられる場合には、基本的に「場所提示」の機能はなく、もっぱら、存在限量によって限定された主体を文脈に導入するという機能を持つ。主体が異なる場合については、「いて」によって存在が導入される主体が、主要な出来事にどう関わっていくかという観点によって整理を行なった。この場合でも、別の主体による出来事を述べる前に、それに主体以外の資格で参加する存在を、「いて」が文脈あるいは文に導入するという機能が認められた。

以上のような「いて」の意味・機能のあり方は、運動動詞や他の存在動詞の中止形の特徴でも確認される。今後の課題として、分析の可能性を示しておく。

運動動詞の中止形が、(72) (73) のような例において、動作やその結果状態を表しつつ、ニ格名詞との結合によって主要な出来事が実現する場所を提示することは

森田（2017）が指摘しているが、これは空間的存在文の「いて」による「場所提示」タイプと共通している。また（74）（75）のような例では、「場所・存在導入」タイプと同様、場面に主体の存在を導入する機能を持つと言える。運動動詞の中止形の場合では、動作や変化といった述語としての意味と定形動詞のアスペクトや中止形自体のアスペクトによって、より複合的な出来事どうしの関係を表現している。

（72）シゲ子は裏手を流れる溝川の洗い場に出て、暗くなったのに洗濯物を激いでいた。（黒い雨）

（73）「おい、静雄」と僕は大声で叫んだ。

静雄は通りのむこう側にたって、なんだと叫び返した。

（きみの鳥はうたえる）

（74）成瀬がいつの間にか横に来て、私の肩を抱いている。（顔に降りかかる雨）

（75）思ったより狭い場所で、見ると、最前列の腰かけに小柄な女が座っていて、入って来るおりくを睨むように見た。（しぐれ茶屋おりく）

運動動詞の中でも「残る、留まる、こもる」といった動作性の薄い動詞の場合には、「いて」と似た意味・機能を表すと考えられる。また、限量的存在文の場合にも、運動動詞によって近い表現がなされる場合があるだろう。こうした点も含めて、従来の運動動詞の記述をより精緻なものにすることが必要になる。

他方、他のタイプの存在動詞についても、「いて」の記述によって取り出された意味関係をふまえて分析することができると考えられる。以下は、無生物の存在を表す「ある」の「あって」「あり」の例である。すべて二つの出来事の主体が異なる場合であるが、本稿で行なった「いて」の分析と同様に、「あって」によって存在が述べられる主体が、（76）（77）のように主要な出来事に別の資格で関わっていたり、（78）のように部分に対する全体を表していたり、（79）のように別の主体の存在の基準となっている。

（76）私の家の裏に大工小屋があって、そこで常雇いの大工と左官が働いていた。（ルソンの谷間）

（77）「鈴木さんは賃貸だったんです。団地の中に家を貸しているところがあって、そこに住んでました。（後略）」（残穢）

（78）叔父の一人がわたしをその酒場へつれて行ったのだったが、その女は青い

頬に長いふさふさした断髪をたれて、その頬の下には長い硬そうな手があり、指にどういいうけなのかがガラスの指輪をはめていた。 (贗・久坂葉子伝)

(79) 壇上には金屏風があり、その前には外科の元主任教授で現在は学部長の野村栄介が座っている。 (義父のヅラ、(34) 再掲)

「いて」と同じく有生物の存在を表す「おり」や「あって」「あり」との対応も確認しつつ、存在動詞というタイプ全体の記述を行うことも重要な課題となる。

注

- 1 本稿では、動詞「手紙を書く」に対して「手紙を {書き／書いて}、投函した」の「書き」「書いて」のように、「文中にあって文を言い切らずに続ける」という構文論的機能と、「テンス・ムードを表し分けない」という形態論的特徴を共通して持つ諸形式を「中止形」と呼び、「書き」のように学校文法でいう連用形相当の形式を「第一中止形」、「書いて」のように助辞テがついたものを「第二中止形」と呼ぶ。「書かれ」「書かれて」「書いており」「書いていて」のように文法的に有標な形式も中止形としてとらえる。「いる」の中止形については、第二中止形の「いて」に対して「おる」の第一中止形「おり」が補充的に用いられる(金水2006:231)。「いる」の本来の第一中止形は「い」だが、一拍語は音的に不安定なためである(宮島1992)。
- 2 出典に下線のないものは手作業で収集した用例、下線のあるものはBCCWJの用例、出典のないものは作例である。例文中、動詞の第二中止形は二重下線、第一中止形は下線、定形動詞はゴシック、デ格・カラ格名詞は点線、強調すべき語句は■、用例の特徴は[]で示す。手作業により収集した例については、/ /で改行を示す(BCCWJにより収集した例では改行の位置は不明である)。
- 3 「いて」が中止的述語として用いられていない場合(「いてくれる」「いてほしい」などの合成述語、「～ようでいて」「それでいて」等)は収集の対象としていない。
- 4 小説以外のテキストタイプの例については、使い分けに文体的要因が関わると考えられる「おり」との比較も見越して収集している。
- 5 動詞述語の否定形式については、用例数が少ないこと、また二つの動詞述語によってその実現が表現される複数の出来事の時間的関係を分析することから、本稿では分析の対象外とする。
- 6 なお、本稿では分析が及んでいないが、主体の同一性の観点からは、今後第二中止

形の「いて」と第一中止形の「おり」の相違を分析する際にも必要になると考えている。

- 7 ここでいう「論述文」には、科学的論述や歴史叙述、エッセイ、ルポ、紀行文、新聞、広報紙、雑誌、教科書、白書といったものを含めている。国会会議録や対談、シナリオ、また上記の文章中に出現する会話やインタビューといった話し言葉性の強い例は含めていない。
- 8 【表1】中「判断保留」としたものは、以下の例のように、同一主体か異主体か判断しづらい例である。この例では、「子供が（私と）友達になった」と考えれば同一主体、「私が（子供と）友達になった」と考えれば異主体となる。
- ・祖父の隣に私より二歳上の子供がいて、年齢が近いためか、すぐに友達になった。
(日本語教師が見た中国)
- 9 次の一つ目の例のように、定形動詞が移動動作を表す場合は、二格名詞と「いて」はデ格名詞相当の「出来事を取りまく場所」ではなく、カラ格名詞相当の「移動の起点となる場所」を表している。また二つ目の例のような場合では、提示されているのは具体的な場所ではなく、主体が存在し、その中で主要な出来事が実現する状況を表している。
- ・僕はホノルルの {ダウンタウンにいて / ダウンタウンから}、キキを追ってここまで来たのだ。
(ダンス・ダンス・ダンス)
 - ・しかし今私たちは人工的な夜のなかにいて貨物列車が通過する悪魔の響きを聞いている。
(エーゲ海に捧ぐ)
- 10 金水 (2006) によれば、眼前描写文では、主語名詞が普通名詞であっても眼前の状況で定項として扱われる。ここで挙げる、既知の主体の存在を導入する場合には主語は固有名詞でもいいため、眼前描写文の典型とは言えない可能性がある。また特定人物の文脈への初出導入という点では限量的存在文の一種である初出導入文とも近い。空間的存在文は「いる」のみが、限量的存在文では「いる」「ある」の両方が用いられるという金水 (2006) の規定に従えば、ここで挙げる例では「いて」を「あって」にしにくいことから、ここでは、既知の主体の導入の場合も空間的存在文の一種として扱う。
- 11 奥田 (1983 : 284) は、「くっつけ動詞と移動動詞 (いわゆる瞬間動詞) は、状態体のかたち (つく—ついている、くる—きている) をとると、存在動詞の資格をもってきて、に格の名詞とのくみあわせにおいて存在のむすびつきをつくる」と述べている。また野村 (2003 : 3) は「テーブルの上にリンゴが転がっている」

や「裏庭に人が三人立っている」のような「存在様態性」を表すシテイル文は存在文の一種であるとしている。

- 12 金水（2006：23）は、小説の地の文では、同一文脈上で、登場人物の目から捉えた描写的な表現としての眼前描写文（空間的存在文の一種）も、語り手の立場から総括的な表現としての限量的存在文も現れうるため、区別が難しい場合があると述べている。以下はそのような境界例であろう。

・救護班の人たちの借りている部屋は、階下の八畳間が四部屋である。人員は甲神部隊の罹災者を合せて五十人内外で、焼け爛れて死にかけているものや呻き声を出したり血便を出したりしているものがいて、膿のためか体熱のためか強烈な悪臭を放っている。（黒い雨）

- 13 中俣（2015）のように、「2つ以上の異なる事態の時間的前後関係が解釈の際に問題にならない時、その事態は並列関係にある（同：10）」といったかたちで「並列」を広く取ったうえで関係の下位類型を詳しく規定するアプローチもある。例えば（56）～（59）のような場合は中俣（2015：150）では「付加：前の要素の成立が後の要素の成立の前提条件になっているもの」になるとも思われる。しかし、ここでは「並列」という上位カテゴリーを設けず、文法的特徴による整理を試みている。

参考文献

- 大鹿薫久（1986）「「て」接続考」『叙説』12, pp.219-228, 奈良女子大学文学部國語國文学研究室。
- 大槻邦敏（1987）「「は」と「が」のつかいわけ」『教育国語』92, pp.22-37, むぎ書房。
- 奥田靖雄（1983）「に格の名詞と動詞のくみあわせ」言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』pp.281-323, むぎ書房。
- （1989）「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい」『ことばの科学』2, pp.11-47, むぎ書房。
- 金水敏（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房。
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房。
- （2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房。
- 中俣尚己（2015）『日本語並列表現の体系』ひつじ書房。

- 西山佑司（1994）「日本語の存在文と変項名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』26, pp.115-148.
- 仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究（上）』pp.87-126, くろしお出版.
- 野村剛史（2003）「存在の様態—シテイルについて—」『國語國文』72-8, pp.1-20.
- 宮島達夫（1992）「1拍語形の不安定性」宮島達夫（1994）『語彙論研究』pp.137-144, むぎ書房.
- 森田耕平（2017）『現代日本語における動詞の中止形の記述的研究』大阪大学文学研究科博士学位申請論文.

用例出典

手作業で収集した用例のうち、文中に引用したものの出典を示す。

- 阿川弘之（1972）『山本五十六（上）』新潮文庫（単行本は1965新潮社）
- 井伏鱒二（1970）『黒い雨』新潮文庫（単行本は1966新潮社）
- 梅崎春生（1951）『桜島・日の果て』新潮文庫より「日の果て」「崖」「蜆」（初出は1947）
- 江崎誠致（1993）『ルソンの谷間』光人社NF文庫（単行本は1957筑摩書房）
- 大岡昇平（1988）『野火・ハムレット日記』岩波文庫より「野火」（初出は1948）
- 奥田英朗（2008）『空中ブランコ』講談社文庫より「空中ブランコ」「ハリネズミ」「義父のヅラ」（初出は2003）、「女流作家」（初出は2004）
- 小野不由美（2015）『残穢』新潮文庫（単行本は2012新潮社）
- 川口松太郎（1997）『しぐれ茶屋おりく』講談社大衆文学館（単行本は1969講談社）
- 川端康成（1957）『山の音』新潮文庫（単行本は1954筑摩書房）
- 桐野夏生（1996）『顔に降りかかる雨』講談社文庫（単行本は1993講談社）
- 桜庭一樹（2007）『私の男』文春文庫（単行本は2004文藝春秋）
- 佐藤泰志（2011）『きみの鳥はうたえる』河出文庫より「きみの鳥はうたえる」（初出は1981）
- 高村薫（2003）『マークスの山（上）』講談社文庫（単行本は1993早川書房）
- 檀一雄（1950）『リッツ・その愛』新潮文庫（単行本は1950作品社）
- 富士正晴（1980）『贗・久坂葉子伝』講談社文庫（単行本は1956筑摩書房）
- 三浦綾子（1982）『泥流地帯』新潮文庫（単行本は1977新潮社）
- 三浦しをん（2009）『まほろ駅前多田便利軒』文春文庫（単行本は2006文芸春秋）

三浦哲郎（1989）『白夜を旅する人々』新潮文庫（単行本は1984新潮社）

三島由紀夫（1970）『真夏の死』新潮文庫』より「クロスワード・パズル」（初出は1952）

宮本輝（1989）『優駿（下）』新潮文庫（単行本は1986新潮社）

村上春樹（2007）『東京奇譚集』新潮文庫より、「偶然の旅人」（初出は2005）

村上龍（2007）『半島を出よ（上）』幻冬舎文庫（単行本は2005年幻冬舎）

Meanings and Functions of *Ite* as the Second Non-Finite
Form of an Existential Verb

Morita Kohei

This paper aims to describe meanings and functions of *ite*, the second non-finite form of an existential verb *iru*, which represents existence of animate subjects by investigating examples of usage in texts.

In composition of a temporal structure of two events, it indicates the simultaneity of an existence of a subject and a main event which is represented by a finite verbal predicate. There can be variations of simultaneity but unlike motion verbs, it doesn't represent precedence of an event regardless of aspectual differences of finite verbal predicate.

Main analysis is done based on the structural difference of the sentences in which the subject of *ite* and final predicate verb is same or not and Kinsui (2006)'s classification of existential sentences. When the subject of two predicates is same, *ite*, as the predicate of the locational-existential sentences, represents the place where the main event realizes as well as the place where the subject exists. It also has a function of introducing characters who appear for the first time in the scene or story. It also introduces existence of a subset or a specified character in a context as the predicate of quantitative-existential sentences but unlike locational-existential sentences, it doesn't represent the place of a main event. When the subject of two predicates is different, *ite* introduces participants of the main events which work in different roles are other than subject.

These features suggest that usage of the non-finite forms of both existential verbs and motion verbs can be analyzed in terms of locational meaning and character-introducing function though they are different in nature of events they represent and grammatical properties.